

学術情報センターにおける研修

教養部閲覧掛長

森

稔 夫

昨年(昭和58年)の11月から12月にかけての4週間、学術情報センターで行われた平成元年度第2回総合目録データベース実務研修に参加した。この研修の目的は学術情報センターと接続している大学図書館において、総合目録データベースの構築を推進するための中心となる指導者を養成し、各大学図書館において目録業務担当者の指導を行うとともに、地域講習会において講師を担当する、というものである。今回は北大から鹿児島大にいたる国立大学から15名、私立大学から1名、計16名が参加し、以下のような内容で研修が行われた。

1) 講義

学術情報センターシステムの概要
総合目録システムの設計思想と展開
情報検索サービス
学術ネットワーク
目録情報処理の国際的動向

2) 総合目録演習・実習

端末操作と目録登録の基礎
入力基準の解説
NCデータの点検
MARC(JP, TRC, LC, UK)変換の理解
地域講習会の企画と運営
地域講習会用テキスト作成
NACSIS-IR実習

この研修についての体験記などはこれまでも他大学の図書館報などにいくつか載っているのだから別の機会に譲り、ここでは視点を変えて学術情報センターにおける研修について概観してみたい。

今から丁度10年前の昭和55年に学術審議会から文部大臣に対して『今後における学術情報システムの在り方について』という答申が出された。その骨子は 1)一次情報の収集整備と提供のシステム 2)情報検索システムの整備 3)データベース

の形成、などを推進する必要がある、そのためには中枢となる機関が必要であるというものである。それを承けて既に昭和51年5月に東京大学に設置されていた情報図書館学研究センターがその中枢的役割を果たすべく拡充整備され、昭和58年4月には東京大学文献情報センターと改組され、昭和61年4月に現在の学術情報センターへと発展したものである。中枢的機関としての学術情報センターの使命は、システム全体の計画と調整、データベースの形成、ネットワーク・システムの整備、研究開発、教育訓練などとなっている。

この内の教育訓練に関係するものとして、学術情報センター及びその前身機関で行われてきた研修の種類には、セミナー、タスク・フォース、総合目録データベース実務研修、目録講習会などがある。

1) セミナー

学術情報システムを構築するための知識・技能の習得を目的としているもので、図書館システム課程とデータベース課程の2つからなる。

1. (図書館システム課程) 図書館情報システムの管理と要員育成の能力の開発

2. (データベース課程) データベースの形成・運用能力の開発

このセミナーの歴史を振り返ってみると、そもそもの始まりは中堅の図書館職員に対して図書館情報学の研究の機会を与えるために昭和47年度に東京大学附属図書館に開設された「図書館情報学セミナー」にある。昭和51年度からは東京大学情報図書館学研究センターに引き継がれ、更に昭和58年度には東京大学文献情報センターに引き継がれセミナーの名称も「文献情報センター・セミナー」となり、昭和61年度には学術情報センターの発足にともない「学術情報センター・セミナー」と名称を変えたものである。「図書館情報学セミ

ナー」がどちらかと言うと研修生個人の研修テーマを主眼に研究を重視したのに対して、「文献情報センター・セミナー」へと変った昭和58年度からはOJT (On the Job Training) の導入など、学術情報システムの進展に即して、より実務を重視する方向に変化して来ているように思われる。内容的には3)の総合目録データベース実務研修と重なる部分が増えて来ているように見える。

また、昭和62年度以降は中断しているがこれは学術情報センターの業務上の都合のための一時的なものか、あるいはセミナーの役割が終了したためか、あるいはセミナーの目的や性格の見直しの必要性に迫られているためかなどは詳らかではない。研修期間は実質15週間。昭和47年度から昭和57年度までに80名（京大から11名）、58年度から61年度までに39名（京大から3名）が修了している。

2)タスク・フォース（特別研修）

各大学の図書館や大型計算機センターから学術情報センターへ併任という形で長期間（概ね半年から1年程度）出向し実務を手伝いながら学術情報システムについての理解を深めるというシビアな研修、（というよりも助っ人？）。

文献情報センター時代を含めて昭和59年度から63年度までの間に計21名（京大から4名）が参加した。その後は学術情報センターの機構の整備などによりタスク・フォースという形の研修は行なわれていない。

3)総合目録データベース実務研修

（内容は文頭で既述）

昭和60年度は東京大学文献情報センターデータベース担当者養成研修として行われ、昭和61年度より学術情報センター総合目録データベース実務研修と改められた。期間は昭和60年度11週間、昭和61年度8週間、昭和62年度からは4週間とな

っている。

昭和60年度から平成元年度までで合計9回、12名（京大から9名）が修了している。

4)目録システム講習会（昭和59、60年度は東京大学文献情報センター）

大学図書館における目録担当者が学術情報センターの目録システムに習熟することを目的としている。目録担当者は原則としてこの講習会または下記の地域講習会を受けなければ目録入力は出来ない。期間は3日間。尚、今年度からは4日間となる見込みである。昭和59年度から平成元年度までで合計28回、664名（京大から10名）が修了している。

その他に学術情報センターと接続図書館との共催で地域講習会（期間5日間）が行なわれている。昭和59年度から平成元年度までで合計45回、463名が修了している。京都大学の場合は電算機のリプレースにともない目録用端末が殆んどの部局に配置されたので今年2月から学内職員を対象に順次講習会が開催されている。

以上、学術情報センターにおける研修について概観したわけであるが、ハードの部分の整備と並行してそれを取扱う「人」の訓練が必須であり、それには時間と予算と人材を積極的に投入しなければならないという当たり前の事を再確認した次第である。

その他にも図書館に関係のある研修は様々な分野にわたって行われており、業務の遂行に不可欠なものとして位置付けられている。

この文を書くにあたり、学術情報センター研修係、目録情報係などからデータの提供をしていただいたこと（集計などで誤りがあれば私の責任）、並びに昨年の研修ではセンターに大変お世話になったことに感謝いたします。